

『英語能ハムレット』に於ける能形式演技の調和を考える A Consideration of How to Incorporate the Noh Style Performance into the Noh Version of *Hamlet* in English

杉澤 陽子

SUGISAWA Haruko

Abstract. This paper considers how to bring into harmony Shakespeare's *Hamlet* and classical Noh when the Noh version of *Hamlet* in English is performed. In Japan classical Noh has been stylized over a period of more than 650 years. By incorporating the meditative scene encapsulated by the lines "To be or not to be; that is the question. / Whether 'tis nobler", Shakespeare's *Hamlet* is fused into the world of Noh where life and death are immaterial.

Key words 『ハムレット』、『英語能ハムレット』、融合 Hamlet, *Noh Hamlet*, fusion

1 はじめに

この小論では『英語能ハムレット』の演出において、シェイクスピアの『ハムレット』と古典能との融合と調和について考察してみる。

これは「融合文化研究第4号」に既に発表したものであるが、当学会会長である上田邦義氏の瑞宝中綬賞の記念に、氏の多くの功績の一つである『英語能ハムレット』について改めて分析し修正を試みたものである。

異なる文化圏に生まれた二つの文化を理解し、あるものは切り捨て、あるものは取り入れ形作することを文化の融合と考え、更に進化を展望しながら『英語能ハムレット』の公演について分析する。

2 音楽劇としての調和と融合について

まず、楽屋から囃子の単調な音が聞こえてくる。これがお調べである。鏡の間ではシテは既に面をつけ心を鎮めて待機し、全ての準備が整ったところで、お調べは行われる。これは決して道具の調整ではない。楽屋、すなわち能を行う人々と客席、見る人々との交流のきっかけとなる行為だ。¹

この時から、能が始まる趣きで、演者だけでなく見所の観客も心を鎮める。橋掛かりと鏡の間を隔てる幕が半分開き（片幕という開き方）囃子の演奏者が登場し、橋掛かりを歩み舞台に入る。同時に切り戸口から地謡が入場し、所定の位置に座付く。

平成16年5月の堺能楽堂における公演では、650年余りを経て現在の形となった能舞台の枠組みの中から古典能本来の大鼓、太鼓、笛を省き、あえて小鼓と尺八の演奏に限ったことで、『英語能ハムレット』の実験的試みが読み取れる。

尺八の演奏は、現代の古典能ではまったく採用されていないが、世阿弥の活躍した室町

¹ 津村禮次郎著『能がわかる100のキーワード』小学館、2001年 p63

時代には、実際に尺八演奏による能が行われていたことが窺われる。世阿弥は同時代の田楽の役者だった増阿弥について、「尺八の能」があって、舞台上で尺八を使用したこと、その音色が出色で無双の上手であったと伝えられている。

『世子六十以後申楽談儀』に次のような記述がある。

「増阿が立会は、余のにも変わりたる」など申者有。尺八の能に、尺八一手吹き鳴らいて、かくかくと謡い、様もなくさと入、冷えに冷えたり。²

それによって、禪的瞑想の場面は透明感が増すことになる。

3 ドラマとしての演出法の融合と調和について

舞台上に囃子方、地謡が座着くと、後見がオフィーリアの亡骸を表す小袖を持ち、幕より出て橋掛かりを通り、舞台正面に静かに横たえる。オフィーリアを登場させず、小袖にて表わす演出は古典能『葵上』で用いられる手法である。

能『葵上』では能の小道具として「病臥の葵上に擬した出し小袖の襟を脇正面へ向けて、舞台正面先へ展る。」³と能の型付けには記されている。『英語能ハムレット』に於いて一曲の構成上巧みに取り入れた演出法である。

上田氏の演出ではハムレットは、「小袖の前で、座禅の態。尺八の音。瞑想に入る。」⁴という演出で現世の無常を表現する。

『能・狂言研究—歴史と特色—』に

世阿弥の作品は禅が取り入れられている。世阿弥はその禅の境地において、義持時代の中期に於いては前期以上の深まりを見せ、晩年に到るほど、その著作に禪的色彩を強めていく。⁵

と記述されている。世阿弥が禅の手法を能の演出に取り入れたことで、彼の作品はその表現に深まりをみせ「冷え」と言う境地に達することになる。「冷え」と言う表現は、世阿弥の伝書『世阿弥六十以後申楽談儀』に記されているが、注釈によると「味わいの深い冴えた芸の形容」である。

『英語能ハムレット』はこの場面に瞑想を取り入れることで、復讐劇を能の世界観に融合させたのである。生死を超越した心境に達するハムレットの深い瞑想の場面は、オフィーリアの亡骸を表す出し小袖と囃子の演奏が調和して、悟りを芸術として高めていく。

4 古典能の詞章の採用について

「英語能」であるから、謡われる詞章もセリフも英語である。しかし一行「思えば仮の宿」とシテが日本語で謡う部分がある。金春禅竹作といわれる『江口』のキリの部分から

2 表章 加藤周一校注『世阿弥 禅竹』岩波書店、1974年 p284

3 観世左近訂正著作『葵上』檜書店、1961年 2枚目裏

4 上田邦義作 *HAMLET IN NOH STYLE* 台本 p7

5 宗方邦義著『能・狂言研究—歴史と特色—』私家版、p6

採用されている。

思えば仮の宿。思えば仮の宿に。心とむなと人をだに。諫めしわれなり。
これまでなりや帰るとて。すなわち普賢菩薩と現れ舟は白象となりつつ。⁶

と謡われている。西行法師がある時、日が暮れて一夜の宿を求めて断られたので「仮の宿りを惜しむ君かな」と口ずさむと、江口という遊女が「仮の宿りに心とむなと思うばかりぞ」と答えたと言う挿話をもとに作られた曲である。一夜の宿りを惜しむ惜しまぬの問題ではなく、この世とても仮の宿であるからそれに執着するなという意味である。

『英語能ハムレット』では中入り後、間狂言の形でホレーショによってハムレットの生涯を語り終えると、ハムレットは瞑想によって悟りを得、生か死か、それはもはや問題ではないという境地に達する。そこに能楽『江口』の謡が挿入される。

思えば仮の宿
This world is not for aye;
All that lives must die,
Passing through nature to eternity.

『英語能ハムレット』に於いてハムレットは “To be or not to be ; is *not* the question” の心境に達する。ここにシェイクスピアの『ハムレット』は古典能の幽玄の極である「冷え」に達するのである。

5 結び

能楽は奈良時代中国から渡来した散楽から猿楽となり、社寺の門前で行われていた芸能である。鎌倉時代には民間から起こった田楽やさまざまな歌舞音曲などと影響しあって発達した。室町時代、観阿弥が現れ、物まね中心の芸能に舞歌を取り入れ、両者を融合させた能楽へと進化させ、それを継承した息子世阿弥は、時の将軍足利義満の庇護を受けながら「幽玄」「禅的なもの」を導入し、より芸術性の高い能楽を完成させる。

シェイクスピアの作品は、日本語による創作能として『オセロー』『ハムレット』『リア王』も発表されているが、この『英語能ハムレット』はシェイクスピア作『ハムレット』をより忠実に能楽化を試み、セリフ劇である原作『ハムレット』を、幽玄、禅思想を取り入れた音楽劇である能楽の形式に融合させたものである。

能楽は650年以上の年月を経て、舞・音楽・舞台・演出をその時代の人々に求められる価値観に沿って変遷し、その舞台建築、演奏者の構成、装束の美意識、囃子の音楽性、いずれも年月をかけて無駄を省き洗練されて、今日の能形式として完成されたものである。

異なる価値観によって培われてきた異文化を取り込み、融合させ、両者への深い理解によって上田氏は『英語能ハムレット』を完成させたのである。同時に、この調和の取れた能舞台の空間が持つ力強さに負けない演技力は不可欠である。『英語能ハムレット』の出演者全員が、この異文化理解とゆるぎない技術を舞台上で実現することで、世界に向けて生きる力を与える演劇として完成するのではないかと思う。

⁶ 観世左近著『江口』檜書店、1961年、11終表

参考文献

- 津村禮次郎著 『能がわかる100のキーワード』 小学館、2001年
宗方邦義編注 『シェイクスピア名場面集』 北星堂、1979年
シェイクスピア作 野島秀勝訳 『ハムレット』 岩波文庫、2002年
上田邦義作 『HAMLET IN NOH STYLE』 研究社出版、1991年
表章 加藤周一校注 『世阿弥 禅竹』 岩波書店、1974年
小林保治 森田拾史郎編 『能・狂言図典』 小学館、1999年
シェイクスピア作 福田恒存 『ハムレット』 新潮カセットブック、新潮社、1993年
西脇順三郎著 『芭蕉・シェイクスピア・エリオット』 恒文社、1979年